



第53回 現代のストレスと呪い

▼ストレスと現代医学

「ノルマ果たさないと厳しいよ」。仕事をしていれば、上司からこんなプレッシャーをかけられることがあるだろう。多くの人は「できないのは自分が悪いから」と責任を感じて苦しむ。ストレスが強くなりすぎると、心が悲鳴をあげ身体がおかしくなってくる。病院で診察していると、いろいろな不調(頭痛、動悸、不眠、疲労感など)で来られた患者さんが、身体的には何も異常がみつからないことがある。「医学的には異常なしで、自覚的には異常」、この表現自体が奇妙で矛盾している。現代の医学は診断名がつけられないと次の手が打てない。だから、病気の未成熟な状態(未病)には対処しづらい構造になっているのだ。患者さんにとって、苦悩を理解してもらえないのは、とてもつらいことである。医学には本来、治療だけでなく治癒(癒す)という目的がある。さまざまなシンボリックな態度(患者のそばにいること、見捨てないこと)が、患者の苦悩を癒す力になる、と理解している医師が、いったいどれだけいるのだろうか。

▼ストレスと現代の呪い

文化人類学は、さまざまな社会の文化を比較し、その特徴を研究する学問である。この分野からストレスの極端な事例が報告されている。それぞれの社会では、個人はその集団が期待する、定められた目標、威信、ふるまいの基準に達するよう仕向けられる。目標に到達できないと、その人には不安や抑うつ(ストレス)を生み出す。このもっとも極端な例は、ヴードウー死、呪いによる死、である。集団内で力をもつ呪術師が、告発の儀式を通じて、社会的な罪をおかした個人に死を宣告する。たいていは48時間以内に、呪われた者は本当に死んでしまうらしい。複雑に絡み合った恐怖、自分の文化的価値基準を完全に奪われること、所属するグループから死人として恐怖・タブーの対象と見なされることで、犠牲者は完全にまいってしまい、生きる気力を奪われる。これはストレスによる「社会的・文化的死」である。

この呪術による死は、未開な部族でみられる特殊な事例と思われるかもしれない。だが現代社会

では、精神病院、刑務所、老人ホーム、解雇、破産でさえも、社会的・文化的な死とみなされかねない。学校での陰湿ないじめも、グループ全員から無視され、本人の価値基準を奪い去るなど、ヴードウーの呪いとまったく同じ構造がある。呪術師にあたるのは、リーダー格の子供だったりする。彼らは、どうすれば相手を「社会文化的に葬り去れるか」をよくわきまえている。いじめの蔓延する学校、ストレスなしでは働けない職場には、目に見えない「呪術師」が潜んでいると考えたほうがよさそうだ。だからこそ、目立たないこと、空気を読むことが、強く求められる窮屈な世界となる。ではどうすればよいのか。私は、この構造自体を壊すのはとても難しいと思っている。ただ、グループを選んでいるのはあなた自身であり、ときにはグループから離れる勇気をもつこと。離れるというのは、距離を置く、あるいは一人になることも含む。自殺するくらいなら、逃げて一人になること(孤独)は決して悪いことではない。あなたという唯一の存在それ自体に限りない意味があるので。ストレスはあなたに由来するのではなく、まわりの環境がそう仕向けているかもしれない気づくのは、とても大事なことだと思う。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)